

「ヨハネによる序言(2)」

ヨハ1:6~13

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

①ルカによる献呈の辞、ヨハネによる序言(1)を終えた。

②今回は、ヨハネによる序言(2)である(ヨハ1:6~13)。

(2) 文書の構造

①階段を一つずつ上るように、ゴールに向かっている。

②イエスの受肉がゴールである(14節)。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

2. アウトライン(6~13節)

(1) ヨハの登場(6~8節)

(2) 光の登場(9~11節)

(3) 神の子たちの誕生(12~13節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 代理人(agent)の意味

(3) 救いの方法

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. ヨハネの登場(6~8節)

1. 6節

「神から遣わされたヨハネという人が現れた」(新改訳)

「ここにひとり人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った」(口語訳)

「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである」(新共同訳)

(1) ロゴスとヨハネの対比

①「初めに、ロゴスがおられた」(永遠の時間)

②「神から遣わされた一人の人がいた」(有限な時間)

(2) 代理人(agent)としての役割

- ①神から派遣された。
- ②使命が与えられていた。
- ③旧約聖書の預言者たちと同じである。
- ④ヨハネには、ロゴスの代理人としての使命が与えられていた。

2. 7～8節

「この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである」

(1) ヨハネの使命は、証し人になることである。

- ①John the Baptist = John the Witness
- ②光について、証しすることが彼の使命である。

(2) 証しの目的

- ①ユダヤ人も異邦人も、男性も女性も、彼の証しによって光を信じるためである。
- ②普遍的救いを教えているのではない。

(3) 注意を喚起する言葉

- ①ヨハネは、光でなく、光について証しする人である。
- ②ヨハネを光だと誤解する人が出ないようにするため

II. 光の登場(9～11節)

1. 9節

「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」(新改訳)

「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(口語訳)

「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」(新共同訳)

(1) 「まことの光」

- ①英語で「true light」である。
- ②ヘブル語の「エメット」は、揺るがないこと、信頼できること、を指す。
- ③偽の光は信頼できないが、まことの光は信頼できる。

(2) すべての人が救われるわけではない。

①人は無知であり、霊的闇の中にいる。

②まことの光であるお方は、全人類に真理を啓示する。

2. 10節

「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」(新改訳)

「彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた」(口語訳)

「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった」(新共同訳)

(1) この方(ロゴス、まことの光)は、創造主でありながら、被造世界に來られた。

①この方は、被造世界の一部ではない。

②これは、ヨハネの福音書の中のクリスマス物語である。

(2) 世という言葉の意味

①ギリシア語で「コスモス」である(神によって整えられた被造の世界)。

②ヨハネの使用法では、「人間が住む地上の世界」と「人間」の両方を指す。

③いずれの場合も、「人間」を抜きにしての「コスモス」ではない。

(3) 悲劇は、「世はこの方を知らなかった」という点にある。

①知的認識のことではない。

②体験的知識のことである。

③特に、ヨハネの福音書では、命の交流、命の体験に強調点がある。

3. 11節にさらなる悲劇がある。

「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」(新改訳)

「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった」(口語訳)

「言は、自分の民のところへ來たが、民は受け入れなかった」(新共同訳)

(1) 「ご自分のくに」とは、「His own things」である(中性代名詞)。

①アブラハムに約束された地、ユダヤ人の住む地、聖書の地である。

②メシアの誕生と公生涯を意識した言葉である。

(2) 「ご自分の民」とは、「His own people」である(男性代名詞)。

①この方は、ユダヤ人のメシアとして來られた。

(3) ユダヤ人はメシアを受け入れなかった。

- ①聖書の中で最も悲しい聖句のひとつである。
- ②ユダヤ人は、メシアを拒否しただけでなく、メシアを信じる者も拒否した。
- ③ヨハネは、ユダヤ人の不信仰に驚いている。
- ④この状況は、今日でも続いている(イスラエルにおける反宣教団体の存在)。
- ⑤パウロは、ロマ書9～11章で、その不条理を論理的に解明している。

*ユダヤ人の不信仰

*異邦人の救い

*終末におけるユダヤ人の救い

III. 神の子たちの誕生(12～13節)

1. 12節に希望がある。

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」(新改訳)

「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(口語訳)

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」

(1) 信仰による救いが教えられている。

- ①「その名」とは、メシアの実質である。
- ②「信じる」とは、知的理解ではなく、体験的決断(命の選択)である。

(2) 「エクサーシア」というギリシア語

- ①特権、力、資格、すべて訳語としては間違っていない。
- ②ヨハネは、法的意味での救いではなく、命の体験について論じている。
- ③「力」が最もいいと思われる。

2. 13節は、救いについての解説である。

「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」

(1) この霊的誕生は、人間から出たものではない。

- ①3つの否定がある。

- (2) 神による(聖霊による)誕生である。

結論:

1. ユダヤ人にとってのロゴス(アラム語のメムラ)

- (1) メムラは、神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある(1節)。

①三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。

- (2) メムラは、天地創造に参加されたお方である(3節)。

- (3) メムラは、救いの代理人(agent)、仲介者である(12節)。

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」

2. 代理人(agent)の意味

- (1) ロゴス(メムラ)は、地上における神の代理人(agent)である。

- (2) ヨハネは、ロゴスの代理人である。

①彼は光ではなく、証し人であることが強調されている(8節)。

②イエスが復活してから20年後でも、ヨハネの影響力はあった。

③使18:25

「この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった」

④使19:1~3

「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、『信じたとき、聖霊を受けましたか』と尋ねると、彼らは、『いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした』と答えた。『では、どんなバプテスマを受けたのですか』と言うと、『ヨハネのバプテスマです』と答えた」

- (3) 自分が光であるかのように振る舞うという誘惑

①説教者、音楽家、すべての奉仕者に、その危険性がある。

②教えを受ける側にも、同じ危険性がある。

③自分が光となろうとすることは、罪の本質である。

④そこから満足を得ている人は、必ず失望する。

3. 救いの方法 (12～13節)

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」

(1) パウロが教える、「信仰と恵みによる救い」と同じである。

(2) 信仰により神の子どもとされる。

①子どもは、「テクノン」(複数形はテクナ)である。

②別の言葉として、「ヒュイオス」がある。

③ヨハネはこの言葉を、イエス・キリストだけに適用している。

④異邦人の感覚では、人は誰でも「神の子」である。

⑤日本語の「神の子」の3種類の意味

*イエスは、「神の子」(ヒュイオス)である。

*クリスチャンは、「神の子」(テクノン)である。

*人類はすべて、神によって創造されたという意味で「神の子」である。

(3) 3つの否定(人間が救いを得ようとする方法)

①血によってではなく

*先祖や両親の血によるのではない。

②肉の欲求によってではなく

*人間の努力や比較によるのではない。

③人の意欲によってではなく

*両親の願いによるのではない。

(4) 福音の3つの要素と信仰

①メシア死

②メシアの埋葬

③メシアの復活

④メシアとの命の関係を強調する必要がある。

*信じるとは、知的承認ではなく、実存的信頼である。